

2025 JOI Program Yr. 21st Report

Japan Outreach Initiative

JOIプログラム 21期コーディネーター活動報告

2年間の任期を終えた第21期(2023年8月~2025年7月)のコーディネーターから、それぞれの活動体験談を寄せていただきました。第1~20期の報告やプログラムの詳細はウェブサイトをご覧ください。

JOIプログラム



JOIプログラムは、国際交流基金と米国の非営利団体ローラシアン協会が2002年より共同で実施しています。

 **国際交流基金**
 The Japan Foundation
 国際交流基金

国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年に独立行政法人となりました。日本の友人をふやし、世界との絆をなくむため、「文化」と「言語」と「対話」を通じて日本と世界をつなぐ場をつくり、人々の間に共感や信頼、好意を育んでいます。

 **ローラシアン協会**
 Laurasian Institution

「異なる文化を背景とする人々が協力し、意義ある国際交流環境を創造していく」ことを基本理念に、1990年に米国イリノイ州で非営利法人として設立されました。国際教育・異文化交流教育に主眼を置いたプログラムの企画・運営を行い、主にアジア・アメリカ・ヨーロッパ大陸間で文化理解を深めるための教育プログラムや情報提供に関わる事業を展開しています。

プログラムの詳細はこちら <https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/exchange/joi/index.html>



お問い合わせ | **ローラシアン協会 東京事務局**
 〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17 Email: joi@laurasian.org Tel: (03) 3712-6176 / Fax: (03) 3712-8975





窪田 美来

KUBOTA Miku

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: イースト・テネシー州立大学 (テネシー州ジョンソンシティ)

外国人観光客が多い地で育ち国際関係に関心を持つ。国際経済を専攻し、豪州短期留学と米国留学を経験。日本語教師資格を取得し、文化発信を通じた交流促進を目指しJOIプログラム応募を決意。



中野 真奈

NAKANO Mana

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: クレイトン大学 (ネブラスカ州オマハ)

シドニーへの短期留学時、ボランティアとして現地の人とかるたや書道を通じ交流することで国際交流への興味を深める。それまでは司書として日本で働く傍ら、海外旅行に行く度に現地の図書館を訪れ、その土地のローカルな雰囲気を楽しむに留まっていた。その際も、いつか海外で活動してみたい思いは常に頭の片隅に。そんな中JOIプログラムと出会い、先輩コーディネーターがアメリカの図書館で生き生きとアウトリーチ活動を行っていることを知り応募。

東テネシーでの濃密な2年間の冒険

私がテネシー州のイーストテネシー州立大学(ETSU)に着任してから、あっという間に2年が経ちました。最初に小さな空港に降り立ったときには、これほど充実した日々が待っているとは想像もしていませんでした。ジョンソンシティの人々はとても温かく迎えてくださり、出会う一人一人から多くの学びを得ながら、地域の中で成長することができました。今回は、その中でも特に印象に残った「コミュニティでのアウトリーチ活動」と「日本への留学引率」についてご紹介したいと思います。

ETSUには日本語専攻と副専攻があり、多くの学生が日本語や日本文化に関心を持って学んでいます。週に1回日本文化クラブが開催され、学生たち自身が主体となって発表や活動を企画します。私はその運営をサポートし、テーマ決めや資料準備、広報活動などを一緒に行いました。すし作りや書道、スポーツ大会など、工夫を凝らした活動を通じて、学生たちは教科書だけでは学べない日本文化を体験し、自然と日本語で会話する機会を増やしていきました。特に「書き初め」では、学生が自分で四字熟語を創作する姿に、言葉への好奇心と集中力の高まりを強く感じました。



ホストサイトでの日本祭り

大学の枠を越えた取り組みとして力を入れたのが、地域でのアウトリーチ活動です。図書館やコミュニティセンターで毎月異なるテーマの文化体験教室を開き、折り紙や茶道、墨絵、和菓子作りなどを紹介しました。初めて出会った人同士が、日本文化をきっかけに交流を深める姿を見て、単に文化を伝えるだけでなく、人と人を結び場をつくっているのだと実感しました。さらに2年目には、活動の範囲を隣州のノースカロライナ州まで広げ、現地の学校で文化紹介を行う機会も得ました。特に州都のローリーでの共同イベントでは、子どもたちの好奇心あふれる反応が印象的で、「来週もまた来てくれますか?」という声を聞いたときは胸が熱くなりました。



地域のコミュニティセンターでの秋祭り



学校訪問



日本文化会での書き初め

一方で、日本への留学引率も忘れがたい経験です。2024年と2025年に、それぞれ日本語専攻やデジタルメディア専攻の学生を対象にスタディツアーを実施しました。半年以上前から行程の計画や宿泊手配を進め、現地では日々のスケジュール管理や緊急対応まで、学生の安心を第一に考えて同行しました。訪問先は東京、大阪、京都、広島など多岐にわたり、伝統文化からポップカルチャーまで幅広く体験しました。茶道や歌舞伎観劇、神社参拝に加え、チームラボの展示やアニメ関連施設の訪問など、学生の関心に合わせたプログラムを組み込みました。



浅草で浴衣体験

特に印象的だったのは、日本の高校訪問です。観光では得られない同世代との直接交流は、学生にとって大きな刺激となりました。日本の高校生からの英語でのおもてなしを受けたり、部活動見学をしたりする中で、日本の高校生の日常を肌で感じ、「また必ず日本に戻って学びたい」という声が多く聞かれました。初めて海外に出た学生も少なくありませんでしたが、異文化との出会いを通じて世界が広がり、人生の大切な転機となったようでした。

この2年間で振り返ると、文化交流は一方通行ではなく、互いの理解と成長を促す双方向の営みであることを実感します。地域で出会った子どもたちや市民の方々の笑顔、日本を訪れた学生たちの輝く目の奥に、未来への可能性が確かに芽生えているのを感じました。ジョンソンシティでの経験は、私にとっても日本文化の価値を再確認し、国際交流の意義を深く考える大きな機会となりました。これからも日本文化を通じて人と人をつなぎ、相互理解の架け橋を築いていきたいと思っています。

2年前の私に、ありがとう!

テキサス州ヒューストンでの着後研修を終え期待と不安を同時に抱えながら派遣地に向かった日のことは、きっとこの先も忘れることはないでしょう。私の2年間で彩ったネブラスカ州オマハは、JOIプログラムへ参加しなければ訪れることはおろか、名前さえ知ることはなかったはずの場所です。ホストサイトのクレイトン大学を中心にさまざまな場所を訪れ、コミュニティに触れ、現地の方から歴史を教わり、2年経った今ではオマハをとても身近に感じています。

日本文化クラブ誕生

クレイトン大学での活動は、2年目に誕生した日本文化クラブをきっかけに大きく動き出しました。既存のアニメクラブが、より広く日本について触れようという目的のもと、日本文化クラブに生まれ変わったのです。さまざまなトピックについて学び、お互いに知識を深める場となりました。特に印象的なのは、ピブリオバトルイベントを企画したときのできごとです。制限時間内にお薦めの本を紹介し、最も多くの「読んでみたい」との投票を得た人が優勝、という日本生まれのこのバトルを、「有名ではないけれど自分だけが良さを知っているお薦めのアニメ紹介」にアレンジし、アニメ好きなクラブのみんなに思う存分熱く語れる機会を設けました。みんな、自分の好きなもののお話になると本当に生き生きとし、普段は口数の少ない学生が渾身のプレゼンのもと会場に爆笑の渦を起こしたときは、笑いよりも感動がこみ上げてきました。JOIプログラムの活動を通じ、安全でリラックスできる第三の場所を提供することは私にとって大きな目標の一つでしたので、このクラブが誰かにとっての居場所になっていたら大変うれしく思います。また、クラブの存在はサステナビリティの観点からも非常に大きく、これからもクレイトン大学において日本文化活動が継続的に行われることを期待しています。



書クラブの皆さんを招いて真剣勝負



おにぎり作りイベント。マルハニチロさん、唐揚げの寄贈をありがとうございました!

公共図書館での活動

日本で司書として働いていたこともあり、図書館での活動は大変楽しみにしていました。折り紙や書道、日本から持ってきた絵本を訳して読み聞かせをしたり、紙芝居を披露しました。参加者の中には「You are the best teacher ever!」「I want a calligraphy set for Christmas!」と声を掛けてくれる子や、ハグで感謝を伝えてくれる子もあり、どれだけ準備が大変でも疲れが一瞬で吹き飛ばす瞬間でした。図書館では子ども向けプログラムに加え、大人向けに妖怪に関するプログラムも担当しました。この時に得た妖怪に関する知識は、私にとっても大きな学びとなっています。更に、スペシャルゲストとして日本在住のアメリカ人妖怪アーティストの方に参加していただいたことは、このプログラムのハイライトとなりました。Zoomで参加者からの質疑に答えてくださったり、日本での活動を紹介してくださったりと貴重な交流の場となり、参加者にとっても私にとっても有意義な時間となりました。

もたちにとって日本は未知の場所で、日本人である私は大変に珍しい存在であることが、彼らの視線や態度でひしひしと伝わってきました。例えば、下見のため前日に会場を見に行った際、「Hi, Mana!」と数人の生徒から笑顔で声をかけられました。きっと、先生からManaという日本人が来るよと聞かされていたのでしょう。私の姿を見れば日本人のManaに違いないと断定できるくらいには、白人中心の町です。彼らにとって日本に触れる機会はこれが最初で最後かもしれないと、毎回そんな思いで臨んでいました。アクティビティの後、参加者の子どもたちから「日本語でManaと私の名前の両方をこれに書いて!」と、作った折り紙と共にこんな可愛いお願いをされたときは、これこそがJOIプログラムの醍醐味だと実感しました。フレンドでの活動は決して大規模ではありませんでしたが、だからこそ一人一人との距離が近く、まさしく草の根レベルでの交流ができました。小さな町での小さな出来事かもしれませんが、私にとっては忘れられない町、忘れられない思い出となりました。



初めて折り紙をする子どもがたくさん

最後に

2年間オマハで充実した生活を送れたこと、無事に日本に帰国できたこと、ひとえに支えてくださった周りの皆様のお陰です。特に、現地の日本人の方々には活動面でも生活面でも大変お世話になりましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。しなやかに遅くアメリカをサバイバルしている先輩方は、いつしか私の憧れの的になりました。そう思える方々に出会えたことは私の財産になっています。

経験と出会い、これらは自分から動かないと得ることができません。また、吉と出るか凶と出るかは後にならないと分かりません。それでも、私はJOIプログラムに参加して良かったと思っています。2年前に大きな決断をして一歩を踏み出した自分に、グッジョブ!と言ってあげたいです。



桃太郎の読み聞かせ。鬼のお面も作りました!

小さな町での触れ合い

最後に、人口1,000人以下のフレンドという小さな町での活動を紹介します。フレンドの子



野田 歩伸

NODA Hono

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: オクラホマ大学 (オクラホマ州ノーマン)

埼玉県春日部市出身。留学や酒蔵インターン、日本文化交流大使の経験を通じ、草の根の文化交流と教育活動に魅力を感じJOIプログラムに応募。



林 典子

HAYASHI Noriko

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: アリゾナ大学 (アリゾナ州ツーソン)

大学在学中「世界青年の船」参加を経て多文化共生と国際交流に関心を深める。卒業後は海運会社に勤めながら日本青年国際交流機構にてボランティア活動を続け、世界に活動範囲を広げるためJOIプログラムに応募。

人と人をつなぐ日本文化交流 —ノーマン市での2年間—

私は2年間、オクラホマ州ノーマン市、オクラホマ大学で活動しました。ノーマン市は大学の街であり、アートとイベントが盛んな街としても知られています。優しい人々と温かいコミュニティが印象的でした。そんなコミュニティの皆さんに支えられ、この2年間で、約350回のワークショップを開催し、8,000名以上の方々へ日本文化を紹介することができました。

特に印象に残っている活動は三つあります。

一つ目は、ノーマン市のシニアセンター、Adult Wellness & Education Center での活動です。このセンターは、50歳以上の方々の健康や福祉を支える場として、身体活動や社会的交流、生涯学習の機会を提供しています。私は毎月3回程度、日本の工芸や料理、文化を紹介するクラスを担当させていただきました。中でも印象深かったのは、オクラホマ大学で行ったジャパン・ウィンターフェスティバルに向けて結成した合唱チームです。メンバーが集まるか不安でしたが、5人の方に参加していただき、本番では坂本九さんの「明日があるさ」を日本語で無事に披露することができました。観客の皆さんからも超えつながりを感じました。また、メンバーの一人から60年前に日本へ留学していた話を伺いました。通っていた大学を尋ねると、なんと私の母校で、日本から遠く離れたオクラホマ州で偶然にも同じ大学に通っていたという方に会えたことに驚きました。この経験から多くの方が日本に特別な思いを抱いていることを実感し、そのような思い出をもっと作っていきけるようなお手伝いをしたいと実感しました。



The Wellでの墨絵ワークショップ

二つ目は、ノーマン市のコミュニティセンター、The Wellでの活動です。このセンターは地域の誰もが参加できる健康、ウェルネス、生涯学習や教育プログラムを提供しています。その一部として2024年7月から2025年4月まで毎月Japanese Experience Seriesを開催しました。折り紙、書道、墨絵、だるまの絵付け、折り染め、絞り染め、つまみ細工、団子やおにぎり作りなど、多様な日本文化を紹介しました。毎回およそ20名が参加し、年齢層や背景も幅広く、回を重ねるうちに常連の方も増えて日本文化に興味を持っていただけたことを実感することができました。The Wellでは地域の方に向けて無料ワークショップが数多く行われており、その一環として日本文化を紹介できたことをうれしく思います。参加者には日本に関心を持つだけでなく、アートや料理に対する興味から参加したという方も多くいらっしゃいました。日本文化の活動が地域の継続的なプログラムに自然に溶け込み、その一つになれたことは私にとって大きなやりがいとなりました。



アニコンでのJASOブース

三つ目は、ノーマン市・京都府精華町姉妹都市提携20周年記念事業です。ノーマン・アート・カウンシル、ノーマン・カルチュラル・コネクションと協力し、小学校間のオンラインビデオ交流、姉妹都市の歴史や文化、特産品を紹介する展示、参加者が体験できるワークショップを企画しました。京都から伝統工芸職人の方もお迎えし、オープニングレセプションには2,000人以上の方が参加してくださいました。「姉妹都市の関係について知らなかったが、展示やワークショップを通して精華町とのつながりを実感でき



ノーマン市・精華町姉妹都市記念展

た」と話してくださる方も多く、地域の方々にこの記念事業を通して日本とのつながりを感じていただけたことがとてもうれしかったです。また、ノーマン市役所周辺への日本の木の植樹、精華町でのノーマン市をテーマにした展示、日本の伝統工芸職人とオクラホマ大学建築学部のコラボレーション、アーティスト交流など、この事業を通してさまざまな新しい取り組みも生まれ、継続的なつながりの一歩になれたこともうれしく思います。

この2年間を通して、私は多くの貴重な経験と学びを得ることができました。特に、企画から実施までプログラムをやり遂げる粘り強さ、多様な背景を持つ人々や団体と協働するためのコミュニケーション力や交渉力、新たな課題に柔軟に対応するための創造性と適応力を培うことができました。何よりも、たくさんの方との出会いをうれしく思います。いつも温かく支えてくださったスーパーバイザー、常に励まし、支えてくださった受け入れ先の同僚やオクラホマ日米協会 (JASO) のメンバー、家族のように接してくださったホストファミリー、折り紙ワークショップを覚えてくれた小学生、「日本文化が自分の居場所を感じさせてくれた」と語ってくれた高校生、ボランティアをしてくれたオクラホマ大学の学生、そして新しい取り組みであっても日本文化のワークショップを快く受け入れ、支えてくださったコミュニティセンターのスタッフの方々——それぞれとの出会いは、本当に意義深く、私にとってかけがえのないものとなりました。



中学校での書道ワークショップ



姉妹都市記念展にて

新たな担い手と居場所をつくるアリゾナでの2年間

私にとってJOIプログラムへの参加は、思い切った決断であり大きな挑戦でした。国際交流にかける思いを胸に、派遣先であるアリゾナ州ツーソンのアリゾナ大学で活動を始めました。ツーソンは州都フェニックスから車で約2時間、メキシコ文化の薫りが残る砂漠の都市です。所属した東アジア学科には日本語プログラムや日本の歴史・宗教の授業があり、街には日本庭園や日本人会も存在していました。文化紹介の土壌は整っていましたが、活動を続けるうちに「文化を伝えること」以上に「居場所をつくること」が大切だと強く感じるようになりました。



派遣先のアリゾナ大学

最初は既存コミュニティのイベントのお手伝いから始まり、徐々に大学や地元のネットワークを拠点とした活動を自ら企画するようになりました。その中で特に取り組みやすかったのが、Table for Two USAと連携したWa-shoプログラムという料理教室です。和食作りを通じて日本の食文化や食育を学べるもので、学生が参加しやすく、体験を通じて文化に触れられる点が魅力でした。おにぎりや巻きずし、あんみつなどを一緒に作り、完成した料理を囲んで試食する時間は心温まるひとときでした。活動後に「家で家族にも作ったよ!」と写真を見せてくれた学生の笑顔に、文化が生活に根付いていく喜びを感じました。



ツーソンにある日本庭園で行った料理教室

一方で、他のコーディネーターの活動をSNSで目にする、「もっとイベントを増やさなければ」「独自性を出さなければ」と焦る日もあり

ました。振り返ると、その頃の私は「成果」を数や新規性で測ろうとしており、この活動の本質をまだ十分に捉えきれていなかったのだと思います。

ホストサイトである東アジア学科は、私に明確なミッションを課さず「やりたいことを自由に試してみたい」というスタンスで支えてくれました。そのおかげで先生方や学生との関わりを通じ、自分なりに課題を見つけて取り組みを調整できました。一つ目に気づいたのは「日本文化を学ぶことの将来性」です。せっかく専攻しても就職に直結せず、趣味で終わってしまう人が多いことを知りました。二つ目は「潜在的な現地JOIコーディネーターの発掘と支援」です。すでに活躍するリーダーだけでなく、参加者の中に日本文化に関わる才能や熱意を持つ人がいることに気づき、共にイベントを企画し一歩を踏み出せるよう伴走しました。



日本の就活風ワークショップで日本プログラムの将来像を学生同士で共有

日本文化の学びを将来につなげるために行ったのが、日本風就活ワークショップです。1週目では自己分析を紹介し、なぜ今の専攻を選んだのか、将来どんな悩みがあるのかを学生同士で語り合いました。さらに2週目は留学経験者や交流プログラム参加者、日本でのインターンシップの経験をもつ学生を招いた「Job Opportunity Workshop」をし、学生に進路の選択肢を共有してもらいました。こうして学生同士で共有できるきっかけが生まれ、ある学生は「進路を考えるきっかけになり、日本に行くモチベーションができた」と話してくれました。実際に日本留学を決意した学生や、日本語専攻へ切り替えた学生も現れました。文化イベントが人生の転機となる瞬間を目の当たりにし、この活動の可能性を強く感じました。

また「潜在的な現地コーディネーター」と取り組んだ例として、よさこいクラブを紹介します。これは現地の社会人と協力して立ち上げた活動です。彼は学生時代に日本でよさこいを経験し、帰国後も続けたいと考えていました。そこで私が大学や地域の参加者をつなげ、練習や発表

の場を整えることでその思いが形になりました。特に印象的だったのは、参加した学生が次第にリーダーシップを発揮し始めたことです。ある大学祭で出演依頼を受けた際、平日の昼間でメンバーが少なく4人で踊ることになりましたが、その学生が楽しそうにデモンストレーションを行い観客を巻き込みました。日本語プログラムの先生方が事前に生徒へ呼びかけてくださったこともあり、最終的には50名以上で踊ることになりました。短期間でこれほどよさこいへの理解を深め、新しいリーダーの活躍を見られたこと、さらにこのイベントをきっかけに新たな仲間が加わる瞬間を共にできたことは、大きな成果でした。



観客を巻き込み盛り上がったよさこい発表

こうした経験を通じ、私一人の力では届かない場所にも日本文化を届けられることを実感しました。そして「人を巻き込み、次の担い手を育てること」が持続的な交流につながるのだと学びました。また、人は誰もが「きっかけを欲している」と、そして「自分を受け入れてほしい」と願っていることを強く感じました。そのような人々を見つけ、伴走し共に企画・実行する喜びを知ったことは、今後のキャリアにとって大きな財産となりました。

JOIとしての役割は一区切りとなりますが、アリゾナでの日々は、日米交流にとどまらず、国や文化の垣根を越えて人と人がつながる喜びを私に教えてくれました。これからも世界中の人々が互いを尊重し合い、安心して自己表現できる社会を目指して、挑戦を続けていきたいと思



大学のイベントで開催したお箸競争



Adult Wellness & Education Centerでの日本舞踊ワークショップ



福本 菜央

FUKUMOTO Nao

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: モンタナ大学ウェスタン校 (モンタナ州ディロン)

大学で教育学を専攻し、短期留学で現地の小学校を訪れ日本文化を紹介した経験から国際交流に関心を持つ。大学院では英語教育を学びつつ茶道や華、日本画に触れ、日本文化を広めたいという想いからJOIプログラムに応募。

モンタナと日本をつなぐ

私はモンタナ州ディロンという小さな町に派遣されました。人口は約4,000人で、自然がとても美しい場所です。毎年9月には大きな口笛が開催され、カウボーイやカウガールたちが各地から集まります。

私のホストサイトは2か所ありました。一つ目はモンタナ大学ウェスタン校です。学生数の少ない州立大学で、学生と先生の距離が近く、温かい雰囲気にあります。私は主に教育学部の授業で日本の学校教育について紹介し、日本文学のコースでは10回にわたり、書道・茶道・着物など日本文化に関するプレゼンテーションを行いました。さまざまな学部の先生方も「学生に多様な文化を体験させたい」と積極的に協力してくださり、授業やイベントを通して貴重な交流の機会を持つことができました。

二つ目はディロン公立図書館です。地域の人々にとって身近で大切な場所であり、スタッフの皆さんが大変協力的にサポートしてくださいました。私は日本の昔話の読み聞かせや折り紙、日本語クラス、墨絵のワークショップなどを実施しました。小さな町だからこそ、日本文化の紹介は新鮮で、どのイベントも多くの方に喜んでいただけました。

ここから、特に印象に残っている活動を二つ紹介します。

田舎の学校への訪問

地域へのアウトリーチとして、周辺の小規模な田舎の学校を訪問しました。これらの学校では、小学生から中学生までの異なる学年の生徒が同じ教室で学んでおり、一クラスは約8人、先生は基本的に1人です。私は2年間で9校を訪問し、丸1日かけて日本語や日本文化を紹介しました。



小学校でのプレゼンの様子



図書館で絵本の読み聞かせ

学校の教科に沿ってカリキュラムを考え、国語では日本語の教科書を見せて名前をひらがなで書く練習をし、算数では数字を数え、社会では日本の学校や浴衣を紹介しました。昼食ではおにぎり作り、体育ではラジオ体操やソーラン節、美術では折り紙や書道を体験しました。特に印象的だったのは、子どもたちが「明日も来るの?」と声をかけてくれたことです。短い時間でも、日本という遠い国に興味を持ち、もっと知りたいと思ってくれたことがうれしく、交流の意義を実感しました。先生方からも「教科書や映像ではなく、実際に日本文化や人に触れ合えることが何より貴重だ」と言っていただきました。小さな学校だからこそ、一人一人と丁寧に関われたことも大きな喜びでした。年齢差に合わせた工夫は必要でしたが、先生方の協力のおかげで全員が楽しめる時間をつくることができました。



日本祭りでみんなでソーラン節を踊っている様子

日本祭り

2024年3月と2025年5月に「日本祭り」を開催しました。特に2025年の祭りは私のJOIでの2年間の集大成でした。準備は約1年前から始まり、助成金申請や各団体との調整を行い、町のお店の協力も得て、町全体で盛り上がるイベントとなりました。2日間で合計20のイベントを開催し、近隣の町からも多くの来場者がありました。

シアトルから和太鼓奏者、日本から箏奏者を招いた演奏は大盛況で、「伝統的な日本音楽の美しい実演で、心から感動した」という声が寄せられました。こうした感想からも、このイベントが文化を紹介する場にとどまらず、人々が交流し、心を動かされる体験となったことを強く実感しました。また、在シアトル日本総領事館職員や近隣のJOIコーディネーターの協力、漫画翻訳者によるオンライン講演など、多方面から支援をいただきました。こどもの日に合わせ、鯉のぼりやかぶと作りなど家族向けの企画も加わり、世代を超えて楽しめるお祭りとなりました。特に印象的だったのは、小さなお子さん4人を連れて参加してくださった保護者の声です。「子どもを連れての参加は大変だが、イベントではとても歓迎されて、子どもたちが大切にされていると感じて本当にうれしかった」との言葉をいただきました。この言葉から、誰もが日本文化を楽しめる場になったと強く感じ、胸がいっぱいになりました。



和太鼓奏者・箏奏者との写真

最後に

2025年10月には、モンタナ大学ウェスタン校の学生が日本を訪れ、教育機関での実習や熊本県(モンタナ州の姉妹都市)訪問を行う予定です。両地域の交流がさらに広がることを期待しています。

この2年間、ディロンの皆さんの温かい歓迎と協力のおかげで、多くの活動を実現できました。地域の人々と共に学び、挑戦し、成長できたことに心から感謝しています。日本文化を紹介するだけでなく、アメリカの教育や地域社会についても学ぶことができました。今回築いたつながりが今後も続き、交流が広がっていくことを願っています。そして、これからも国際交流を大切にし、新たな架け橋を築いていきたいと思っています。



村松 舞奈

MURAMATSU Mana

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先: テネシー州アジア文化センター (テネシー州ノックスビル)

中学時代の米国ホームステイをきっかけに異文化への関心を深める。大学で米国留学を経験し、卒業後は営業職として多忙な日々を送りながら休みを縫って17か国を旅した。文化体験を届ける側になるべくJOIプログラムに参加。

“Rocky Top, you'll always be home sweet home to me!”

2年前、テネシー州に赴任して間もなく訪れたアメフトの試合で、何万人もの大合唱と共にこの歌を耳にしました。なんと故郷愛の強い地域なのだと思われたものです。そして2年の任期を終えた今、私もこの美しいテネシー州をふるさととして愛するひとりとなりました。

これまでどこにあるかも知らなかった地をそう思わせてくれたのは、紛れもなくこの2年間のJOIプログラムの活動を通して出会った人々です。

Southern Hospitality (南部のおもてなし)の精神が息づくテネシー州は、日本企業の進出や、元・駐日大使の上院議員を輩出するなど、日本との結びつきも深い州です。一方で、日本人に出会ったことのない人々にも多く出会う、活動しがいのある地域でした。

私のホストサイトであるテネシー州アジア文化センターは、毎年7万人を超える来場者を誇るアジア・フェスティバルを10年以上開催してきた実績があります。そのため、私は、ただ異文化理解の種まきをするのではなく、これまでまかれてきた種に水をやり、肥料を与え、つぼみを咲かせることが自分の役割だと考えました。

この2年間で316回のイベントを開催し、延べ1万811人に日本文化を届けました。コーディネーターとしてアウトリーチ活動だけでなく、運営支援や地域の集まりへの参加、時には着物ショーのモデルとして舞台上立つこともありました。

また、自身の活動内容や意義を地域に伝え理解を深めてもらうことで、行政や団体から合計8,000ドル以上の資金援助をいただくこともできました。

2年目のアジア・フェスティバルでは、日本パビリオンのリーダーとして30以上のテントを取りまとめる一方で、よさこいと盆踊りのリーダーも務めました。

よさこいの舞台には、約40人の協力者が必要でしたが、大学所属ではない私にとって学生を



Onigiri makes you happy!



風呂敷ワークショップ

集めるのは容易ではなく、これまでのアウトリーチで出会った学生たちに個別に声をかけたり、イベントで募集を呼びかけたりして仲間を集めました。最終的には目標人数を達成し、みんなで大舞台に立つことができました。

よさこいを通して、観客や参加者に日本文化を届けられたことはもちろんですが、参加した学生たちからは、「マナのおかげでみんなが仲良くなった」「自分のコンフォートゾーンを広げてみたくて参加したけれど、本当に良い決断だった」など、心に残る言葉をもらいました。そのとき、私の役割は、単なる文化紹介にとどまらず、仲間をつなぐこと、そして人としての成長を後押しすることなのだと思われ、この仕事の素晴らしさを深くかみしめました。

盆踊りでは日本語補習校の生徒とともにパフォーマンスを行いました。日本文化を紹介したいという思いと同時に、海外で暮らす日本人の子どもたちにも、自分のルーツを大切に、日本を誇りに思ってもらいたいという気持ちがありました。

ある保護者の方からいただいた「海外で活躍するお姉さんの姿を見て、「いつか自分も」と思った子どもたちもいると思う。そんな姿を見せてくれて、そんな存在でいてくれてありがとう」という言葉は今でも心に深く残っています。

そして2年目の6月には、アメリカの高校生による日本でのホームステイを実現することができました。私自身、12歳のときのアメリカでのホームステイが原点となり、今の自分があります。だからこそ、次の世代にも「人生が変わるような体験」を届けたいという想いから、Lead Teacher (引率者)として意気込んで参加を申し込みました。

準備は決して容易ではなく、最初の説明会は参加者ゼロというスタート。通常の活動と並行しながら、全8回の事前勉強会を実施するのは大変でしたが、「とにかくやりきる」と心に決



Yosakoi メンバーと

め、実施へとつなげることができました。2週間の滞在中、生徒たちは日本語での注文に挑戦したり、初めての納豆に戸惑う表情を見せたり、ホストファミリーとの別れに涙を流したりと、文化の違い、そしてそれを知る楽しさ・温かさを全身で受けとめる姿が印象的でした。その姿は、かつて異国で同じような経験をした自分とも重なりました。

「人生が変わる経験をさせてくれてありがとう」——その言葉を生徒から聞いたとき、このプログラムに携われて本当によかったと心から感じました。

コーディネーターの役割は、日本文化を伝えることにとどまらず、「文化を紡ぎ、心をつなぐ」ことだと感じています。日本の伝統や価値観を絶やさず、受け継ぎ育てていくこと。そして、その交流が途絶えないよう、その重要性を次世代へとつなげていくこと。この2年間の活動を通じて、これが私たちJOIコーディネーターの使命であると強く実感しています。

心動かされる瞬間にあふれた2年間。多くの方々との出会い、その温かさに触れ、支えられながら、前を向いて走り続けることができました。

最後に、どんなときも「YES! Let's do it!」と背中を押してくださったスーパーバイザー、そんなスーパーバイザーやテネシー州との縁をくださったJOIプログラム、さらにたくさんの支援と愛をくださった多くの友人たちに、心から感謝の気持ちをお伝えいたします。



2年間の貢献に対する表彰



森安 幹男

MORIYASU Mikio

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先:ダラス・フォートワース日米協会(テキサス州ブレイン)

幼少期に見た子ども向け教育番組「セサミストリート」をきっかけに、異文化に興味を持つ。大学では教育学部に進学し、米国の大学院でTESOL(第二言語としての英語教授法)を専攻。帰国後、公立高校で英語教育に携わる。ホームステイの引率や、米国大使館の言語教育プログラムを履修する中で、自国の文化を発信することの大切さに気づく。価値観が多様化するグローバル社会において、現地の人との交流を通じて日米の相互理解を深めたいと思い、JOIプログラムに応募。



山本 亜希子

YAMAMOTO Akiko

JOI Yr. 21st
(2023年8月～2025年7月)

派遣先:ウェスト・フロリダ大学(フロリダ州ペンサコーラ)

大学・自治体職員として国際交流や観光振興に携わる中で、地方における異文化交流の重要性を実感。さらなる活躍の場を求めJOIプログラムに応募し、米国での国際交流活動・日本文化紹介活動に挑戦。

「つながる」ことの大切さを知った2年間

JOIコーディネーターとして過ごした2年間は、本当に充実したものでした。2023年3月に合格通知をいただき、国際交流基金日本語国際センターでの渡米前研修、テキサス州ヒューストンでの着後研修、初めて派遣先を訪れた日のこと、すべてが昨日のことのように思い出されます。そして2025年7月、活動を終えて日本に帰国しました。

私の派遣先は、ダラス・フォートワース日米協会(JASDFW)です。オフィスは、人口約29万5,000人のテキサス州ブレインにあります。周辺には日系企業もあり、大都市ダラスや近郊都市を含め、推計5千人の日本人が暮らしています。JASDFWは日本とテキサス北部の日米関係を強化することを目的に、1970年に創立された非営利団体です。ビジネスや文化イベント、言語・教育プログラムなど、様々な活動を通じて日米の相互理解と交流を促進しています。今回、2年間の活動で印象に残っているものを紹介します。



JASDFWスポンサー企業、トヨタ自動車北米本社を訪問

JASDFWの一員として

派遣先のJASDFWの行事に携わることは、スタッフとして大切な任務の一つです。主な行事に、Otsukimi Moon Viewing Festival、Golf Classic、Sun & Star Award Dinnerと称される。準備にスタッフ総出で当たるものがあります。関係機関・ベンダー・スポンサー企業との打ち合わせ、機材や必需品の準備など、当日まで多忙を極めますが、チームで取り組むことで単独のアプローチでは得られない一体感を味わえました。大規模な行事ではボランティアの協力も不可欠であり、その行事を存続させるためのサステナビリティに寄与していることを実感しました。また、ホストサイト周辺のコミュニティイベントに参加するときは、準備を一任されました。ブースでは書道やおみくじなど、日本文化を体験できるものを提供しました。初めて参加するイベントであっても、来場者とのふれあいを通じて、JASDFWの広報活動に貢献できました。



Otsukimi Moon Viewing Festivalの書道体験コーナー

ジャパン・クラブ

ホストサイトに着任後、最初に与えられたミッションは、ある高校でジャパン・クラブを立ち上げることでした。クラブの活動日は毎週水曜日の放課後です。早速、年間計画を作成し、初顔合わせのオリエンテーションで予定を紹介しました。毎週、テーマを変えて準備するのは大変でした。人気があったのは、食に関するものでした。おにぎり・お好み焼き・天ぷら・恵方巻など、食を体験できる日は大盛況でした。苦労したのは、台所のない教室で効率よく行うために事前準備が必要だったこと、日本の食文化を楽しめるということで想定外に参加者が増えたことでした。2年目のジャパン・クラブは他のアプローチとの都合上、月2回に変更しました。回数が減った分、内容を精選し、参加者の希望を反映させるようにしました。また、サステナビリティを考慮して主導権を少しずつメンバーに委ねたので、彼らの主体性も高まりました。ジャパン・クラブは2年間で計46回実施しましたが、今後も主体的にクラブが運営されることを願っています。



お月見だんごを作って、メンバーみんなで味わいました

日本語プログラムを持つ教育機関への訪問

一年目にダラス日本語スピーチコンテストのボランティアをしたことで、ホストサイト周辺の高校や大学で日本語を教えている先生とつながり、ゲスト・プレゼンターとして依頼されたテーマに基づいてプレゼンテーションをする機会に恵まれました。生徒や学生は、所属する教育機関で日本語を選択科目として履修しているこ

ともあり、日本に対して高い興味や関心を持っています。生徒や学生が熱心に受講してくれたので、準備に時間がかかっても報われる思いがしました。ある高校では、校外学習として美術館への引率、アジアン・フェスティバルでの日本ブースのお手伝いも依頼されました。また、別の高校では、JOIの任期がまもなく終了するというので、春学期最後の授業で感謝状をいただきました。大学については、私の出身地である倉敷市の姉妹都市、ミズーリ州カンザスシティで行われたジャパン・フェスティバルで切り紙のインストラクターをした縁で、ホストサイトから車で1時間の大学の先生とつながりました。日本語を教えているその先生の授業では、JOIの活動と折り紙で立方体を作る方法を紹介しました。このように、日本語プログラムを持つ教育機関で言語と文化を融合する取り組みをしたことで、生徒や学生の日本語学習を支援できたことをうれしく思います。



Austin Collegeで折り紙による立方体の作り方を紹介

2年間の活動を終えて感じることは、「意志あるところに道あり」ということです。アプローチが思うように広がらなくて悩んだこともありましたが、JASDFWのスタッフが親身に相談に乗ってくれたおかげで、前向きに取り組むことができました。また、お会いした人が縁で活動につながったことから、「ふれる。つながる。世界が広がる。」というJOIのキャッチフレーズにある、「つながる」ことの大切さを感じました。JOIコーディネーターとしての活動を支援してくださいましたすべての人に感謝するとともに、この貴重な経験を今後の人生に活かしていきます。



お世話になったJASDFWのスタッフとともに

新しい自分と出会えたフロリダでの2年間の軌跡

2025年7月、JOIコーディネーターとして過ごしたアメリカでの2年間の任期を終えて、今、とても充実した気持ちで満たされています。

私にとって初めての海外生活であったこのアメリカでの2年を振り返ると、まさに新しい自分と出会えた、成長と発見、そして感謝にあふれた日々でした。

JOIプログラム参加前は、日本で長年デスクワークを中心に働いていました。そのため、JOIコーディネーターとして、ある意味エンターテイナーのように人に感動を届ける活動は、新鮮であると同時に、私にとって大きな挑戦でもありました。

1年目は、JOIコーディネーターとして、ホストサイトであるウェストフロリダ大学(UWF)のキャンパス内外のコミュニティに確かな存在感を築くことを目指しました。創造性にあふれ、質の高い日本文化ワークショップやプログラムの提供が不可欠と感じていた中、JOIプログラムには、各種研修や先輩・同期のコーディネーターから得られる多くのヒントやノウハウがありました。そうしたリソースを積極的に活用し、折り紙、だるまペインティング、和紙の折り染め、書道、茶道など、さまざまな日本文化をキャンパス内外のできるだけ多くの場で紹介するよう努めました。そのために、ホストサイトであるUWFだけにとどまらず、日米協会やマイアミ日本国総領事館の方々とのネットワーキングや情報共有も積極的に行い、1年目はコーディネーターとしての基盤づくりに注力しました。

2年目には、紹介する日本文化コンテンツのカスタマイズ、大学での日本語会話コースや書道コースといった新たな取り組みの導入、そしてアメリカ・フロリダ州と私の故郷・山口県の架け橋づくりなど、活動の視野を広げ、成果を意識した展開を目指しました。

このような思いで駆け抜けたフロリダ州ペンサコーラ市での2年間の活動の中から、特に印象深い活動を2件ご紹介します。



子どもたちと「へのもへし」

一つ目は、UWFと山口県立大学との学生交流事業設立への支援です。JOIの重要なミッションの一つに、「コーディネーターの任期終了後も日本文化の普及活動や日米交流が継続されること」があります。この理念に基づき、フロリダと出身地である山口県との継続的な交流の枠組みを築きたいと取り組んだ結果、両大学が協定を締結し、学生交流事業を設立・開始に携わることができました。

その第1期の交流において、アメリカ側の参加学生の伴走者として、また日本からの参加学生の相談役として関わったことは、JOIコーディネーターとしての大きな成果となりました。任期中に山口県の日米協会の理事に就任したことを機に、今後は大学生に限らず、市民間のフロリダー・山口県との交流の可能性についても検討していきたいと考えています。



UWFで学ぶ日本人学生と一緒に日本をPR

二つ目は、2024年4月にUWF内のJapan Houseで執り行われた叙勲伝達式の進行役を、在マイアミ日本国総領事より任されたことです。私の活動を評価いただき、日本人を代表する立場で式典進行を任せていただいたことは大変光栄であり、忘れがたい経験となりました。この式典をきっかけに、地域の皆様にJOIコーディネーターとしての存在を広く知っていただけるようになり、その後の活動につながる多くのお声かけをいただきました。

さらに、当日に着用していた着物リメイクドレスも注目を集めました。アップサイクルという形で世代を超えて受け継がれる日本文化の精神を象徴するものとして、出席者から多くの関心と共感をいただいたことは、文化紹介の方法に対する新たな学びとなりました。

着任当初は月に2～3回であったアプローチ活動も、最後には週3～4回、多い時には1日に複

数回実施するほどに拡大しました。準備も含めると相当な活動量でしたが、「限られた時間の中でできる限り多くのアメリカの皆さんに日本を伝えたい、そして自分自身も悔いなく活動したい」という思いが、私を突き動かしていたと感じています。



イベントでの書道ワークショップ

フロリダ・ペンサコーラでのJOIコーディネーターとしての2年間は、自分の中に眠っていた可能性と向き合い、新たな自分と出会う時間でもありました。迎えてくださった大学、そして地域の方々との温かい交流に支えられて、2年間、充実した活動を行うことができました。特にUWF国際オフィスのエグゼクティブディレクターRachel Hendrix、そしてディレクターのRandolph Scottの両人に、公私にわたり私のアメリカでの活動を見守り、支え、そして導いてくださったこと、本当に感謝申し上げます。再度お二人と共に活動できる日を楽しみにしています。

関係していただいた皆様への感謝の気持ちを忘れず、今後もこの経験とご縁を大切に育みながら、日本のすばらしさを世界に、そして次世代に伝えていきたいと考えています。



活動を支援してくれた大学のスタッフと